

事例で学ぶ！ドラッカーで苦境を跳ね返せ(第10回)

何で憶えられたいか編 “名ばかり専務”が脱皮

2016.07.04

経営者はその生涯を通じて自らへの問いかけを続けるものだ。対してドラッカーが自らに問いかけたのは「何によって憶えられたいか」だった。未来を見据え、食品卸から食品メーカーへの業態転換を成し遂げた「真田」の真田千奈美専務は、この言葉にけん引され、さまざまな経営改革を打ち出した。今回はその解の一例を紹介する。

ドラッカーに学んだ先輩企業(7) 真田(後編)

●ドラッカーの言葉

「私が13歳のとき、宗教の先生が『何によって憶えられたいかね』と聞いた。誰も答えられなかった。すると、『答えられると思って聞いたわけではない。でも50になっても答えられなければ、人生を無駄に過ごしたことになるよ』といった」
(『非営利組織の経営』)

〈解説〉ドラッカーが生涯、自らに問い続けたのが「何によって憶えられたいか」。昨日と異なる自分であり続けるためだ。誰にどんな存在として憶えられたいかを問うことは、未来に思いを馳せること。未来の人々が、今の自分の貢献に感謝し、記憶に残す。そんな未来を生み出そうと考えれば、おのずと後世のために今、自分がなすべきことは何かを問うことになる。姿勢が変わり、行動が変わる。覚悟が決まる。

初めは主婦業の延長のようだった。食品メーカー、真田(京都府宇治市)の真田千奈美専務は33年前に、当時取締役だった真田佳武(よしたけ)社長と結婚。経理や総務を手伝うようになった。「家計簿を付けている感覚だった」という。

真田は1904年、煮干し問屋、山城屋として創業。戦後、スーパー向けの食品卸などに業容を広げ、株式会社に改組した。そのけん引役だった中興の祖が、病弱だった初代社長の妻で前会長の悦子氏だ。

だが、悦子氏の息子の佳武社長は食品卸の将来性に疑問を抱き、千奈美専務との結婚と相前後して、干物に特化したメーカーへの業態転換を断行する。30億円ほどあった売り上げをいったん約5億円まで落としたものの、高付加価値路線が当たり、2005年12月期には売上高36億円まで成長させた。

その間、千奈美専務は肩書こそ役員だったが子育てにも追われ、経営陣としての意識は薄かった。

自分の生きる意味を問う… 続きを読む